

# F D 研究：学習場面と授業パターンの整合性

日下 和信

大阪キリスト教短期大学

## 1. 明確な目的を設定して授業をしているか？

筆者は、以前に「日下の授業4段階説」という研究を発表している<sup>(1)</sup>。その主要な指摘は、「学習内容にふさわしい授業パターンがあること」であった（授業の目的別に4段階の授業を考えた①伝える授業②教え込む授業③考えさせる授業④自ずから考える授業：本日別紙で配布）。この説は講義形式の授業を前提にしているが、この表に基づいて授業を構想する有効性として、次の2つのポイントがあると考えられる。

その1は、日本の教員の多くは、殆どの授業を「教え込む授業」で展開していて、“学習者に対して、より高次の学習と考えられる「考えさせる授業」や「自ずから考える授業」の実践には、まだ十分な努力が振り向けられていなくて、今後積極的に実践して欲しい授業段階だと考えられること”。その2は、“この説を適用することで、各々の授業場面で、何を主目的に授業をするかが明確に位置付けられるようになること”である。

その1での授業への改善提案としては、教員主導の授業として「教え込む授業」は効率的で、殆どの学習場面で実践できるが、学習者に考えさせて能力開発することを重視すれば、安易に慣れ親しんだ授業方法として「教え込む授業」を採用するのは良くないことになる。それらのためには時間が掛かるけれども、学習者に学習の実質を与えるには「考えさせる授業」や「自ずから考える授業」の形態の授業を考案する必要があるのではないかという意味である。

その2での授業への改善提案としては、「授業に明確な4つの目的を設定することで、各々の授業場面で何を目的に授業をするかが自動的に定まり」、学習の段階的な進展が授業者によく予見できることである。その実際上の有効性は、“どの授業場面で、学習者に考えさせるか”という授業計画が、前後の授業場面を考慮しつつスムーズに立てられるようになることだと思われる。なぜなら「考えさせるには」、前もって考える材料になるものを与えて置かねばならないわけで、（学習者が持っていないとすれば）考える材料は多くの場合「教え込む授業」で効率よく教えることになる。その準備の後に「考えさせる授業場面」を設定することになる。こういう必然性から授業構成を考えるならば、どの場面で考えさせるかの計画が立てやすくなるのである。

「授業4段階説」は、その時点で広く流布しなかったが、筆者の細々とした実践から授業計画を立てる場合に十分な有効性があることを確かめている。

## 2. 授業段階・授業パターンの発想を持つだけで講義のやり方に広がりが出る

大学教員で、授業に何通りかの授業パターンを意識されている人は極々例外的存在だと思われる。殆どの先生は「慣れた教え方」を中心に授業をされているだろう。そんな先生が、授業場面毎に学生に「伝えるか・教え込むか・考えさせるか・自分で研究させるか」ということだけでも意識されると、授業やゼミでも「うんとメリハリが付いてくる」に違いないと思われる。例えば、ゼミ中ふらっと部屋を出て行くにしても、「考えさせる場面」

だと意識して席を外すと、学生に良い意味で考えろというシグナルが伝わると期待できる。考えさせるタイミングで何となく席を外してこられたよりも、多分違った効果が出ると考えられる。その理由は、考えることを促す一言を発するか、無言かによらず、“それなりの緊張感が持続する”からである（教員の意識は学生に結構伝わるものである）。他の学習場面でも同様の良い影響が考えられる。主導権を授業者が持つのか、学習者に委ねるのかということが、自然に意識に登るためである。良い授業は、授業者と学習者の情熱と適度な緊張関係が無くては実現しない。是非意識して、授業に臨んでみて戴きたい。

### 3. 第5段階目の授業が見えて来た⇒「論ず授業」

この説に基づく実践を続けながら、実は近年5段階目の授業段階があることに気付いてきた。それを目下、「論ず授業」と呼んでいる。それに気付いてきた過程は、年の功とも関係があるのだろうけれども、他方で「年々進む、大学生の精神的幼稚さ」に関わってきたことにもよると思われる。昨今多くの大学で、「授業中に、学生が私語したりメールをするようになって来た」。この状況は、“学生の本分が、勉強であることを忘れ、学習に関心が向かっていないことの証拠”である。一部の例外的な大学を除いて、日本の多くの大学は、“遊び人”で溢れているのが実情である。この現実を認めるならば、“遊び人”を如何に「学究の徒」に変えるかを考える必要が出たので、「論ず授業」の必要性が見えて来たのである。

### 4. 現在の大学・短大で必要な「論ず授業」とは

残念ながら、高校までで、学問がどういうもので、学問をすることの意義等も教えられていないようだ。その結果、多くの高校卒業生は、「勉強＝受験勉強＝学問」といった関係でしか学問を捉えていないようなのである。そのため、“テストが済めば、忘れてもよいと考えている”誤解が蔓延しているのである<sup>(2)</sup>。こんな現状からも「論ず授業」の必要性が明白になる。これ以外にも「人生や生き方について」や「正当な職業観」も教えてやらねばならないようなのだ。「生きていくために、お金を稼ぐ必要を知らながらも、自分のやりたい職業が見つからなければ、フリーターに成ればよい」と思っているようなのだ。老婆心を起こすと“論ず授業”の出番がどんどん増えてしまうのである。

### 5. 「論ず授業」の成立条件

「論ず授業」は、高度な授業である。授業者の人格がものを言うからだ。そのため、授業者が、“本物人間”である必要がある。へなちょこでは負けてしまう。「大人に対抗的な一部の学生・青少年」は、自己中心的で、理屈にならないような理屈と不満の感情で凄まじい迫力で迫ってくる。それを、平然と捌く必要があるからである。そして、「正しいと確信する内容を落ち着いて、説得的にゆっくり語りかけられる力量」があつて、話しに迫力が加わり、話を素直に聞き入れようと感じさせる雰囲気醸し出せるのである。「論ず授業」は、人格を賭けた真剣勝負になるので、絶大な影響力を持つ代わりに、姑息な考え方を背後に持っているようでは逆効果になる。

#### 参 考 文 献

- 1) 日下和信『より良い授業を求めて(5) —より良い授業類型の関係—』日本科学教育学会・研究会研究報告、巻4 No.6、53～58頁 1989年
- 2) 巨海玄道『入学後の理系学生の物理学習形態—大学間比較—』、第21回物理教育研究大会発表予稿集 PP82-83、日本物理教育学会、2004年